

あるべき姿へ。

考え、試し、未来の美や常識を切り拓きたい。

卒業生インタビュー 同窓異曲



建築家 塚田 眞樹子

Makiko Tsukada

工学部卒業

自然環境と人のつながりを重視し、創造性に富んだ建築をつくり出す塚田眞樹子さん。建築家としての歩み、世界からも注目される作品を生む発想の源について伺った。

―建築家を目指したきっかけを教えてください。

大学卒業後は、大林組で構造設計を担当していました。その時、丹下健三氏が設計した「代々木体育館」に出会って衝撃を受けました。日本の伝統的な意匠を継承し、クリエイティブに利用しながら新しい建築をつくり上げていく。このような独創的な建築をつくり出す意匠設計に興味を持ち、建築家に関する本を多く読むようになりました。

最初は自分では建築家になれるとは少しも思っておらず、別世界のことでした。ただ、このような世界に身を投じて建築家をサポートできる存在になりたいと考えようになり、竹山実さんの事務所に入りました。竹山さんは、北海道出身で、ポストモダン建築を切り拓いた建築家です。そして、建築界のノーベル賞とも称されるプリツカー賞を受賞した坂茂さんに師事しました。その後、建築の

世界から一時距離を置いたのですが、自分で発想して物をつくりたい、自分には建築しかないと思うようになって、自分の設計事務所を設立するに至りました。

―建築家とは？

一級建築士など、建築士にはライセンスが必要です。建築家は海外では「architect」、日本では定義が曖昧で資格もありません。そのため、建築家でありたいと思ひ、日々努力するんです。建築家は考えることが仕事であり、思想を持つということから、哲学者に近いかもしれませんね。具体的には、人間の生活や活動にとって何がいいのか、どうあるべきかを考えます。どうしたら気持ち良く過ごせるか。建築単体だけ

ではなく、建築を取り囲む環境とのバランスが大事です。今は非常識だと思われていることでも、将来は常識となりえます。そういうことを考え切り拓くのが建築家だと、私は思っています。

ユニークな建築には理由がある。

―塚田さんが手がけた住宅「トンネルハウス」は、印象的な外観ですね。この敷地はT字路の突き当たり

に位置するため、トンネルを設けることで抜けを作り、周囲に圧迫感を与えないことを意識しました。

床・壁・天井と明確に分かれているのが、普通の建築の概念です。この建築がユニークなのは、どこまでが床か、壁か、天井なのかかわからないところ。壁がそのまま天井になり、2階の床にもなります。

でも、きちんと強度的・構造的に成り立っていて、空間が広く見える効果もあります。

不安定な形状に見えますが、奇抜さを狙ってつくったわけではありませぬ。必ず理由があり、



作品のひとつ「Tunnel House (トンネルハウス)」。塚田さんの作品は、オランダ、オーストリア、ウクライナ、ドイツ、イタリアなど、世界各国の建築雑誌に掲載されている。

シャープペンシルは0.4mmのHBを愛用。「建築家は通常1.0mmの太さでデッサンしますが、私は0.4mmの繊細なペンも好きです。緑色のマーカーもよく使いますね」



必然性のあるものをつくります。外に柱がないのは使いやすい駐車スペースを確保するため。建築をつくるにも理由がないと前に進めないタイプなんです(笑)。

この建築もそうですが、「自然や環境と人をどうつなげていくか」は私のメインテーマです。建築をつくることは、街並みや景観をつくることだと考えています。

もちろん内側からの景色も大事です。周囲に恵まれた景色がなければ、空を取り込んで景色をつくり出します。そして、これら作品は自己満足にならないよう必ず発表することを心がけています。

―お仕事で活きている大学時代の経験はありますか？

破壊実験などを頻繁に行う研究室で構造学を学びました。その影響か、何をやるにも自分でサンプルを作り、実験します(笑)。現在は、屋上庭園を造る場合に、どんな植物が適正かを調べるため、実際に植物を育てているんですよ。

―将来の展望や本学への期待をお聞かせください。

常に新しいことを試みていきたい。前進することで成長できる



製図に没頭した大学時代。「設計・製図の授業では、みんなをあっという間に驚かすようなものを描いてみようと思っていました」

と考えています。それと、海外から日本に帰国すると、少しがっかりすることはないですか？日本を美しい街並みにしていくことにも参加したいと思っています。

美しさと技術力は、相反するものではなく一緒に考えられるべきものです。北大は素晴らしい技術力を持っていますので、その技術力を景観や観光資源を生み出すような方向にも使ってほしいですね。

PROFILE

1961年、北海道生まれ。1986年に北海道大学工学部建築工学科を卒業後、大林組で構造設計を担当。1989年より竹山実建築総合研究所、1993年より坂茂建築設計に勤務。1995年に塚田眞樹子建築設計を設立。独創的な建築デザインで、海外からも注目を集め始めている。



丹下健三、並びに塚田さんが師事した竹山実と坂茂の作品集。「それまでの建築の概念を覆してくれた方々です。竹山さんや坂さんからは多大な影響を受けました。丹下氏の「美しきもののみ機能的である」という言葉が好きなんです」